

# 発達障がいをもつ子どもたちの サポートプロジェクト

代表者 村井 万智 (医学部看護学科3年)

## 1. 目的と概要

このプロジェクト事業は、高松平和病院主催の障がい児サークルにボランティアとして参加し、障がいをもつ子供や家族と接し共に過ごしていく中で、必要のあるサポートが何か自分たちで考え協力し行い、活動を通して将来の医療職者としての自分を捉えなおす機会とするものです。

## 2. 実施期間（実施日）

平成24年5月20日 から 平成25年3月31日まで

## 3. 成果の内容及びその分析・評価等

このプロジェクト事業は、昨年度と継続しての夢チャレンジプロジェクトで、昨年の反省として、主催である高松平和病院の方とうまく連絡が取れずぎりぎりになってから平和病院の方が企画した活動を補助するという形になっていたことや、医学部学生以外から参加している人とうまく連携をはかれていなかったことがあげられていました。

そこで参加する医学部生がもっと団結し積極的に活動内容を考え企画し運営をしていくことを今年度の目標に取り組みました。活動でどのような物を使ったら子供たちにとってよいのかを一緒に考えていく機会を設けたり、平和病院の方と相談して年間で決めていた企画を変更し、電車企画を行ったり昨年の反省を活かし連携をとりながら主体的な行動をしていくことができました。また、スタッフの方と活動後に反省会をすることで、そのときの企画を見直すことができ、次はどのようなことに気をつける必要があるのかなどに気づくこともでき、振り返りを行いながら次の活動に移ることができました。

実施内容としては計画していた、①中央公園にて運動会 ②国分寺町の末沢農園でどろんこ体験 ③小豆島で夏合宿 ④中野公園でままごと、遊具活動 ⑤三木町の高仙山芋ほり、山登り ⑥高松平和病院でサンドイッチ作りを実施することができました。また計画としてはあげていませんでしたが、電車企画を実施しました。

①中央公園にて運動会では、参加した子ども達がグループになって、そのグループでゲーム通じてルールを守るということを理解させるために行いました。最初はルールが守れなかった子どももボランティアと一緒にルールを守り参加することができました。

②国分寺町の末沢農園でどろんこ体験では、泥の感触を知り、泥の中で歩くことで感触を楽しみ全身を使って動きまわり、足元をとられないよう踏ん張るなど身体のバランスを保つ姿がみられました。泥に触れるのを怖がる子どももいましたが、無理にいれるのではなく子どもが興味を示してもらえようボランティアが工夫しながら参加することができました。

③小豆島で夏合宿では、子どもと長い時間関われる機会でも子どもの出来ることや苦手なことを発見することができました。また、保護者の方と話す機会があり、子どもの悩みや今までの苦勞、喜びなど深く子どもについて知ることができました。

④中野公園でままごと、遊具活動では子どもの自由な発想で道具で遊んでもらい、子どもの得意とする部分や個性を見ることができました。

⑤三木町の高仙山で芋掘り、山登りでは自分がいつも食べている物がどのようにできているのかを学び、自分の手で収穫する経験をする事ができました。山登りでは子どもにあった距離を自分の足で歩き、目標達成の充実感を感じることを目標に行いました。

⑥高松平和病院でサンドイッチ作りでは、自分が食べているものを自分で作り、食べ物の作る大変さと大切さを知ってもらうことを目標に行い、活動の中で細かい作業が求められ手をうまく使ってサンドイッチを作る事ができました。

電車企画については、障害を抱えている子供たちの大部分は車での移動が主となっていて電車などに乗った経験が少ないということが保護者の方たちと話している中でわかり、子供たちに様々な経験をしてほしいという思いから企画し実施しました。電車企画では高松琴平電気鉄道協力のもと、平和病院のスタッフが準備した模擬切符を本当の切符と同じように車掌さんに渡して電車に乗る体験をしこれから社会に出て行くに当たってのルールと一緒に体験をすることができました。また子どもたちは朝から電車に乗ることを楽しみにしており、子どもたちの笑顔を多く見ることができました。



(みんなで準備運動)



(どろんこ体験)

これらの活動は、活動を通して子どもたちの苦手とする能力について援助することで、いずれ自立することを目指して行われています。また、子どもたちが活動に参加している

間に保護者の方は、情報交換を行ったり、不安な事を出しあったり、発達障がいのある子どもをもつ親同士グループとして勉強会を行っています。

このプロジェクト事業を利用した事によって、子どもたちに様々な体験をしてもらう事ができ、子ども達は様々な経験をする事ができました。その経験が子どもにとって成長につながっていくのではないかと感じました。



(夏合宿で子ども達と二日間一緒にすごしました)



(電車にのりました)



(道具を上手につかいます)

#### 4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

このプロジェクト事業を実施したことにより、参加者の子どもたちは家では体験できない事を経験することができ、その中で、子どもの発達につながるようなサポートを行う事ができたと感じています。また様々な体験を通して子ども達が日常で自立した生活を送れるように、ルールを学ぶ機会になったり、子ども達が苦手とする部分を取り組む機会になっていると思います。

また保護者の方は、普段知らなかった子ども達の出来る事、出来ない事、得意な事、苦手な事を新たに知ることができる場であり、家族同士の交流の場となり、障がいをもつ親同士であるからこそ相談できたり、情報を交換できたり、息抜きができる場となっているのではないかと思います。また、子ども達の年齢も幅広いので、将来の子ども姿を想像できる場にもなっていると感じます。

また、医学部だけでなく本学全体に対しても、活動の参加を募り参加されていることから、今まで発達障がいを持つ人と関わった事がなかった学生も、関わる機会ができ、発達障がいについて理解を深める事や、どのような支援が必要なのかを考える機会に繋がっていると思います。少しでも多くの人に発達障がいについて知ってもらうことで、発達障がいを持つ人が社会で適応しながら生活していけるだけでなく、偏見なく地域でその人らしい生活を行える社会作りにつながっていくのではないかと感じました。

#### 5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

今回の活動により、1つの診断名でも子どもたちは誰一人同じ子どもはおらず、子どもの個性にあわせたサポートや見守りが大切になると、教科書では学ぶことができない事を実際に体験することで感じる事ができました。子どもにあわせたコミュニケーションの取り方や道具の使い方など苦労する事はありましたが、子どもとうまく意志疎通がはかれた時はとてもうれしく感じました。そのような体験を通して自分達が当たり前に行っていることは当たり前ではないという事、その人にあつたコミュニケーションの必要性、相手の気持ちを読み取る事など医療従事者や、教職者として求められるものを改めて感じ、自分自身を捉えなおす機会となりました。

もっと周りに目を向け、1つの考え方にとらわれ物事をとらえていくのではなく、柔軟な考え方を持ち、様々な人と接し、1人の人間としてすべての人を尊重し、寄り添い、思いやりながら生活することが大切だと感じました。

#### 6. 反省点・今後の抱負（計画）・感想等

毎月の企画を通して子供たちと関わっていくことで、毎月毎月子供たちの変化を見ることができ成長を確認することができ、その関わりの中で一人一人子供の課題を見つけ、どのような関わり方がこれから必要なのかを考える機会を得ることができました。活動終了後に、スタッフや学生が受け持った子供のことを話すことや記録に残していくことで、うまくいかなかったかかわり方やうまくいった関わり方を把握していき、次の企画時に活かしていくこともできました。

また、子供たちと関わる中で自分にはなかった捉えかたや発見を子供たちから学ぶことができ自分たちは限られた視野の中で物事を判断しているのだと気づくことができました。

毎回子供たちと安全に企画を実施していくのは子供は私たちが考えてもいなかった行動をとったりするので、苦勞することもありましたが、他の参加学生やスタッフの方々と協力することで子供の安全を守っていくことができているのでやはり、参加している学生やスタッフが連携しあうことの大切さをとても感じました。

今後の改善点としては、保護者の方とゆっくり時間をとってお話をするという機会があまりなかったので、保護者の方と話をする機会を増やしていくことで、子供たちの成長と一緒に感じて行けるようになるのではないかと思います。これからも子供たちと様々な体験をする中で、子供たちだけではなく私たち参加者も成長できるよう、企画への参加を続けていきたいと思っています。

## 7. 実施メンバー

代表者	村井 万智	(医学部3年)		
構成員	福井 友紀奈	(医学部3年)	田川 涼葉	(医学部2年)
	岡田 怜子	(医学部5年)	森並 次朗	(医学部2年)
	内藤 覚	(医学部5年)	田畑 諒	(医学部1年)
	廣瀬 亜里紗	(医学部4年)	上杉 俊太郎	(医学部1年)
	窪井 涼子	(医学部4年)	宇保 早希子	(医学部1年)
	片岡 みどり	(医学部2年)		